

【暗証聖句】「兄弟としていつも愛し合いなさい。」ヘブライ 13：1

【日・神の民を思いやる】

ヘブライ人への手紙 13 章 1、2 節に、「兄弟としていつも愛し合いなさい。旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました」書かれています。同じ信仰を持つ者同士は赤の他人ではなく、神の家族です。だから兄弟のように愛し合いなさいと教えています。その具体的な愛の実践として、「旅人をもてなしなさい」と教えられています。当時は、今のように宿泊施設が充実しているわけではありませんでしたので、旅人は助けが必要だったのです。

以前いた教会で、お子さんを三育に入れ、ご自身も時々教会に来られていた方がありました。この方が教会に来るきっかけとなったのは、ある外国の教会員にもてなされたことでした。彼は若いころ、外国に旅行したときに、お金が無くなってしまいとても困ってしまったことがあったそうです。そのとき、なんと見ず知らずの SDA の教会員が、彼を 1 週間もてなしてくれたのでした。帰国後、教師となり結婚し、お子さんも生まれたのですが、その外国でお世話になった教会のことがずっと心にあったそうです。そして、調べたところ、日本にも同じ SDA の教会があること知り、また学校まであることを知って、迷うことなく自分の子供を入学させたのでした。「ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました」とありますが、これはアブラハムの経験を指しているのでしょうか。アブラハムは三人の人が自分の天幕を通り過ぎようとした時、この見知らぬ人々を心からもてなしました。実は、彼らは人の姿をとってやってきたイエス様と天使だったのです。これは特別な例ではありますが、もてなすことがいかに大切なことかを教えてください。

ローマの信徒への手紙 12 章 13 節でも、「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい」とあります。もし、その旅人が巡回伝道者であれば、もてなすことによって間接的に伝道の働きを助けることができます。また信徒であれば、信仰の喜びを分かち合うことができるのでした。

また、ヘブライ人への手紙 13 章 3 節では、「自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちを思いやり、また、自分も体を持って生きているのですから、虐待されている人たちのことを思いやりなさい」と教えられています。大切なことは、信仰のゆえに捕らえられている人たちや虐待されている人に対して、自分が同じ立場にいたならばどうだっただろうと考えてみることです。いま、ウクライナの戦争で多くの難民が発生していますが、隣国ポーランドでは、見ず知らずのウクライナ人を自分の家に受け入れている人たちが大勢いるようです。戦争という悪の力に飲み込まれてしまいそうな中で、神の愛がより一層強く表されているのです。

【月・食欲と性的不道徳】

ヘブライ人への手紙 13 章 4 節では、「結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、夫婦の関係は汚してはなりません。神は、みだらな者や姦淫する者を裁かれるのです」と教えられています。当時は、性的不道徳に対して意識が低い時代でした。そのような時代にあって、聖書は正しい夫婦の関係や性的問題をタブー視せず、きちんと教えています。ヘブライ人への手紙 13 章 5 節では、「金銭に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。神御自身、「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない」と言われました」と、金銭欲に対して注意を促しています。金銭欲に関しては、古代ギリシャ・ローマでも社会悪の一つとみなされていました。クリスチャンのお金に対する考え方ははっきりしています。それは「金銭に執着しないで、今持っているもので満足」することです。同じ教会員でも豊かな人と貧しい人がいることでしょう。しかし、比較することなく、自分に与えられているもので満足することを学ぶことが大切なのです。満足するためには、与えられているものに感謝をささげていくことです。また、金銭欲とはまた別の、お金の心配についての問題にも触れています。「神ご自身、わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない」と言われました」とありますが、イエス様が「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」と思い煩うな。それらのものがみなあなた方に必要なことを主はご存じである」と言われたように、神様を信じて、すべてを感謝し委ねていくと

き、これらの問題から解放されるのです。

【火・指導者たちのことを思い出さない】

ヘブライ人への手紙 13 章 7 節では、「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出さない。彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい」と勧めています。どの教会にも教会の礎を築いてきた信仰の先駆者たちがいます。彼らは様々な困難の中で信仰を守り遠し、教会をたてあげ発展させてきました。そのような人たちを思い出すことによって、私たちは信仰が励まされ勇気づけられるとともに、見倣うべきことが多いことに気づかされるのです。もちろん、同じ人間ですから完璧ではなかったでしょうし、時代的な信仰の違いもあることでしょう。それでもやはり、教会をたてあげてきた信仰の先輩方から学ぶことは多いのです。特に、その生涯の終わりを見なさいと言っていますが、生涯の終わりには、その人がどのように生きてきたかが現れてくるからでしょう。ところで、ヘブライ人への手紙 13 章 8 節に「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です」とあります。信仰の始まりであるイエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方なのですから、どの時代の信仰者であったとしてもその信仰の本質は変わりません。

【水・色々な異なった教えに迷わされず】

信仰の本質は決して変わることがありません。それは信仰の対象である神様が変わることがないお方であり、神様の教えである聖書も変わることがないからです。ところが、ヘブライ人への手紙 13 章 9 節を見ると、「いろいろ異なった教えに迷わされてはなりません」と書かれてあり、同じ神様を信じ、同じ聖書を手にしても異なった解釈や異なった教えが生まれていたことがわかります。ここでは、食べ物について述べられていますが、「食べ物ではなく、恵みによって心が強められるのはよいことです。食物の規定に従って生活した者は、益を受けませんでした」とあります。これは旧約聖書の食物規定を否定しているわけではなく、本当に大切なことは食べ物ではなく、神様の恵みの中に生き、強められることであるということをお教えているのです。この背景には、おそらく食物に関する規定などを宗教生活の中心におこうとするエッセネ的な禁欲を重んじる分派があると思われる。ヘブライ人への手紙 4 章 16 節でも、「だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」とあるように、ただ神の恵みによって救われるのです。このことを否定あるいは何かを付け加えるような教えに惑わされないように注意しなければなりません。

【木・宿営の外のキリストのもとに行く】

ヘブライ人への手紙 13 章 11~13 節「なぜなら罪を贖うための動物の血は、大祭司によって聖所に運び入れられますが、その体は宿営の外で焼かれるからです。それで、イエスもまた、御自分の血で民を聖なる者とするために、門の外で苦難に遭われたのです。だから、わたしたちは、イエスが受けられた辱めを担い、宿営の外に出て、そのみもとに赴こうではありませんか」

宿営の外は最も汚れた場所とされていました。そこで犠牲として捧げられた動物の死体が焼かれました。これと同様に、キリストはエルサレムの外で十字架にかかり、自ら「汚れた者」「恥ずべきもの」となりました。神であられる方が神であることを固執せず、自らへりくだって人となり、さらにその死の様も、犯罪人の一人として数えられ、しかもエルサレムの外で汚れた者として死んで行かれたのでした。しかし、これにはもう一つの意味がありました。宿営は本来神の民が神様と交わる場でしたが、民が罪を犯したときには、神様は宿営の外に出てしまわれました。イエス様を拒んだエルサレムはもはや聖なる宿営の場所ではなくなっていました。だから、その外を聖なる場所とし、イエス様は十字架にかかって命を捧げられたのです。それは「御自分の血で民を聖なる者とするため」であったと書かれてあります。だから、ヘブライ人に対して、我々も宿営の外に出て、主のみもとに赴こうではありませんかと勧めているのです。つまり、伝統的な考えや、今いるところから出て、主のみもとに出ていこうということです。主の恵みの中で、信仰の一步を歩みだそうではないかと教えているのです。